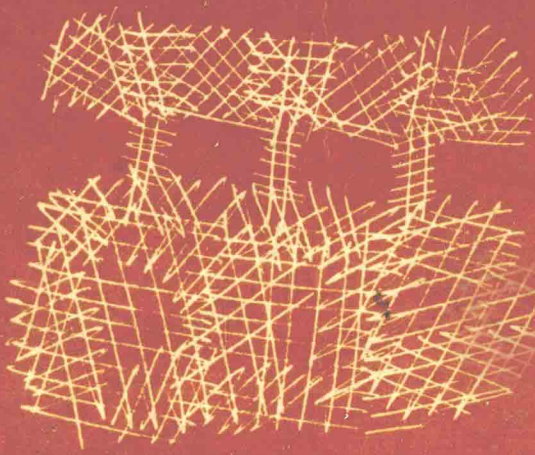
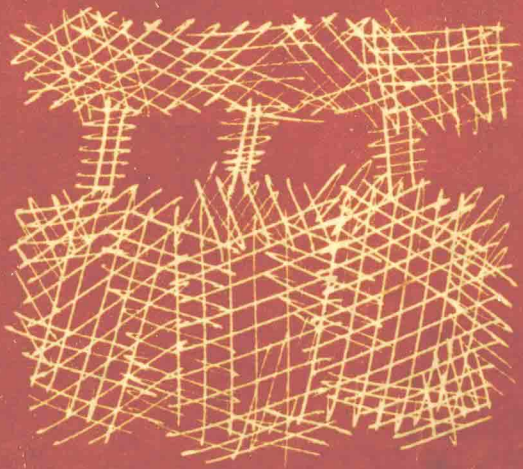




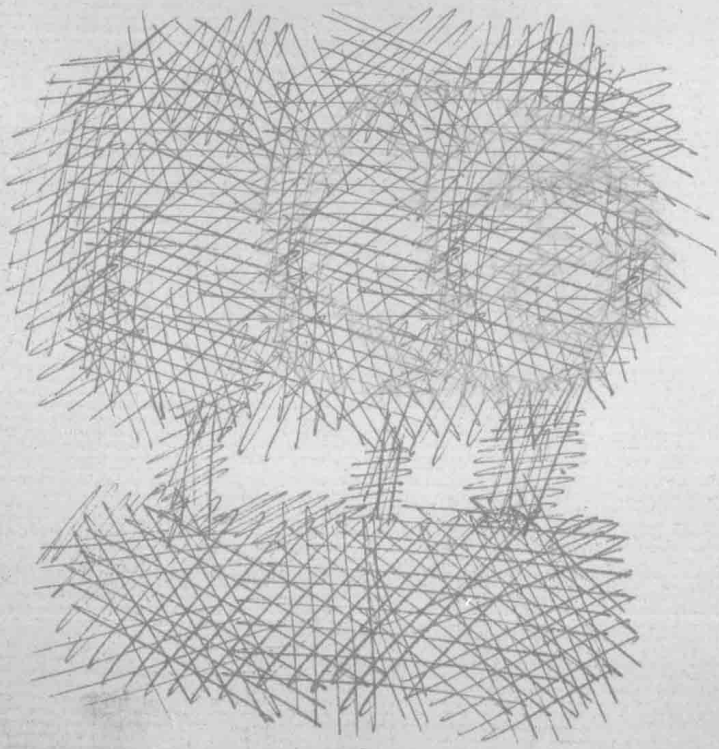
愛と死の森奥付

昭和 35 年1月 20 日 印刷
昭和 35 年1月 25 日 発行
定 価 340 円
著 者 斯 波 四 郎
発行者 栗 林 茂
印刷者 松 村 保
印刷所 明和印刷株式会社
製 本 大 完 堂
発行所 雪 華 社
東京都中央区京橋 1 丁目 7 番地
振替（東京）42150

1960 Shiro Shiba Printed in Japan ©

愛と死の森

斯波四郎



雪華社版

第一章　南溟の贈物　7
第二章　時間の森　51
第三章　華燭の扉　84
第四章　静かな抵抗　135
第五章　森の儀式　170
第六章　夜の音楽　195
第七章　故里の女　215
第八章　愛と死の森　247
あとがき　278

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀

伊藤廉

愛と死の森

第一章　南溟の贈物

戦場で体験を重ねれば重ねるほど勇気のある兵士になるように一般には思われているが、事実は、その反対であつた。負傷したことのある兵隊は臆病になるというのが真実らしかつた。意識はしないにしても、もういちど、痛い目にあうことは傷づいた肉体がおびえるのである。

数年前、中支の奥地で左の股と腰部に負傷した伊達繁は左足の屈伸が少し不自由である。歩行にさしつかえはなかつたが、長時間歩くと痛みをおぼえた。もともと戦時下にあつては役にたたぬ美術関係の研究所につとめている彼のような人間の存在は無にひとしいものであつた。それでも傷痍軍人というので大目にみられていた。

ここ一、二年、彼は何回となく病院に入つては出てき、出てきては入つた。腰椎のどこかに故障があるのではないかというのだが、はつきりしなかつた。

シンガポールの陥落、バタビヤ、スマトラの占領と勢づいた戦争だつたが、内地の空気は言論、出版取締令の公布、衣料切符制の実施、新聞の建頁の減少などと次第に険しくなつてゆくのが、病院のベッドにねていても、ひしひしと伝わつてきた。

伊達の巨きな軀のなかでも、恐怖が底ふかく忍びこんで棲みはじめた。険しくなつてゆく内地の空気が、ひと一倍、敏感にひびいた。黒い翳がたえず心中をおおつている気がした。夜明けなどに、ふと眼がさめると、そのあとは不眠症のように眼が冴えかえつて眠れなかつた。大きな図体をベッドに横たえて、意味もなく重いものが胸に閊えているような思いであつた。

ある夜明け、朝焼けした病院の森のシエルトをベッドから伊達はみていた。すると、どういう観念連合かわからないが、その森から痩せ衰えた黒い影が疾走りでた。と思うと街という街を群れをなした痩せ衰えた狼が彷徨している幻覚がうかんできた。

それからというもの、どうかすると伊達はその幻想にたえず悩まされた。神経衰弱だと考えてみるものの、幻覚は一面、真実をふんだものであり、まるきり虚妄でもないよ

うである。伊達繁のおびえた内面祈求が現実と交錯して、幻覚となつて表われてくるともいえた。

街に一匹痩せたのが姿を現わすと、彼らは悲しげな遠吠えの叫びをあげた。悲壮の美しさと凄みの利いた声であつた。彼らは永遠に満されることのない飢餓にうながされて啼くのである。すると、たちまち、どこかの物蔭から、一匹、二匹と痩せ細つた犬のような姿が現われて、また悲しげな声をあげた。

みるみるうち彼らは十匹、二十匹と集まつてきて激しく遠吠した。夜の島々まで、ひびきわたるように啼くのである。そして彼らは、また四散してゆく。と思うと街に、農村に、食堂に、波止場に姿をあらわす。生活者や街のひとびとは決して殉教など望みもしないし、いや、恐怖さえおぼえているのに、彼らは疾風のようにかけよつて、つぎつぎと個人の臓腑をくいつくす。

臓腑をくいつくされた者は倒錯した殉教にかりたてられ遠吠えをはじめる。そして自らが痩せた狼となり、つぎの獲物を狙つて疾走りだすのである。狂気につかれた黒い影の空疎な呻きや、叫びをあげているのをおびえた伊達の内面は、毎日のようにきいた。

それは外の世界のことではなく、伊達の内面風景である。国が滅びるか、どうかの境であることはわかるのだが、次第におたがい同志が怒鳴つたり、喚めいたり、誇張した威嚇をはじめる気配のなかで、奇妙な殉教精神が気弱わなものをおどかしはじめた。そんな威嚇で、なにが解決できるかと、伊達のなかでたえず抵抗するものがあつたが、その声は日に日に細々としたものになつていくのである。

伊達は病院のベッドにねながら、弱つてゆくのをくい止めたかつた。

「とにかく市民になるこつた」

と心のうちに呟いて暮らした。なにかの本にかいてあつた言葉に彼は縋みつくようにしているのである。

「市民はなによりも個我を大切にする。つまり、市民というものは本質的には生活衝動の弱い生き者で、いつでも中間に生きようと望んでいる動物である。陶酔にも、禁欲にも自分を捧げたくない人種である。自分自身を犠牲にすることを、びくびくして、そつと隠れてくらしたがる」

伊達は隠れてくらす者になりたかつた。市民のなかに踏み止まりたいと思うのであつた。

倒錯した殉教にかりたてられ、たちまち臓腑をくい荒されると、つぎには自分が他人の臓腑をくつて生きてゆかねばならない飢餓におそわれる。その得体の知れない内面の黒い影に彼はおびえるのである。

市民はすべての強烈なものをすてて、身の安全と安定した生活圏をもとめる。法悦や陶酔よりも、良心の安らかさを愛し、享楽のかわりに安楽さをもとめる。身を焼くような熱のかわりに快よい温度を選ぶものだともかいてあつたが、この市民の怯懦をせめた言葉に伊達はかえつて、心の愛着をおぼえた。いまの時代は、怯懦をじつと守つていることが、かえつて勇気のあることのような気がした。

市民は自らの権力を行使することが嫌いであるし、権力の前に身をさらして、わが身を犠牲にしたくない。そこで権力に対しては多数を、暴力のかわりには法律をきめ、その楯と柵によつておたがいの安全を守つてゆこうとするものであるが、翼賛政治によつて、その柵すら取除かれた。そして黒い豺狼が、柵のなかにおどりこんで、羊の群れをつぎつぎにくい荒しはじめた。

臓腑をくわれた羊は、そのまま狼となつて、つぎには街にいつて他人の臓腑をくい荒そうと眼を光らせている。

こうなつては臓腑をくい荒されないで、ひそかに羊そのものになつて踏み止まるしかない。伊達は、いままで鈍重な兵士であり、鈍い研究所員ではあつたが、一度だつて市民という自覚にたつたことはなかつた。市民的な要素は伊達も多分にもつていたが、自ら市民を誇りとし、認識したことはない気がした。

自分でも信じない、いや、まるで興味もない国策さまに殉教して不具になり、このうえ、死ぬことは嫌だよ、御免だよと口ではいえないが本能的に彼は後すだりする気持であつた。

「おれは市民になるんだからね、市民に。身を灼く熱なんて、もう十分だよ。ほんとうだ。快よい温度のあるところを、おれはどこかに探さなくては、ぬるま湯をね。どこか身を潜める森をさがさなくては」

そんなことを絶えず考えた。卑怯をかくし勇者の身振りを欲し、鈍重を鋭いものにみせかけようとしてきた自分を、伊達は苦がく反省するのである。伍長殿になつて不具の報酬をうけた——その精の出し方が、なんだか阿呆くさくなつたのかもしれない。

そんなわけで三回目の退院をすると、生活をなんとか根

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本からかえたくなつた。どこか暗い森にひそむように、自分の巣をつくりたいと伊達は考えてくらした。そんなとき、R新聞社の社会部につとめている大学の同級生である田所が特派員としてビルマ戦線に従軍することになつた。そのあとを伊達は譲りうけることになつた。田所の壮行会を伊達は久慈と二人である酒場でひらいた。田所は元気一杯に飛行機で翔び立つた。その翌日、伊達は明け番の久慈につれられ翠明荘を訪れることになつたのである。

晩春の憂欝な、燃えるような緑のこもつた日曜日である。伊達と久慈は電車に揺られていた。車窓に樹影がちらちらする。欝蒼とした森のなかに公園がみえた。公園脇の坂みちを電車はのろくのぼつていつた。

経済部にいるだけあつて、世間では敗戦の予想など、まだだれもしていないのに、久慈は軍部や政府のやり方を分析してみせ、声をひそめて悲観論をきかせるのである。伊達は彼の説を肯定しながら、もつと別の重い憂欝なものを軀のなかでもてあましていた。怒りというには鈍重で、憂欝というには激しいものが、よたよたと軀のなかでよろめいている気持であつた。

電車をおりた伊達は不自由な足をなげだし、なげだしして久慈のあとをついていつた。二人は停留所から電車通りを、そのまま上つてゆき、塔のある小公園の反対側に入つていつた。

「あと三丁ぐらいですが、ちよつと、このあたりの風景をみませんか。わりに環境はいいですよ」

久慈はいつた。新聞社のひとにも風景などに関心があるのか。「自分には、そいつが重大問題だがな」彼は思うのである。

黒塀から緑樹のはみだした静かな住宅地帯をとおりぬけ、二人はやがて泰山木と松の枝の延びた庭あとみたいな台地の一隅にでた。屋敷あとなのか、三四本の樹木があり雑草が繁つている。

雑草のなかには敷石が白く露出している。草叢のなかの石に立つて久慈は

「いいでしよう、なかなか」

といつた。久慈の指ざす翠明荘のあるあたりは、森閑として晩春の光線のなかに静もつていた。樹々のあいだでは病院や白い洋館、教会の塔、黒い屋根が、きらきらと光つ

ていた。

なるほど久慈のいうように、この一帯は東京の市街が海となつておしよせる汀線ともいうべき地形であつた。彎曲した丘陵地帯が断崖をつくつている。断崖の下には繁華な街が俯瞰され、遠望のなかに日本橋も、神田も霞むのである。眺望すると市街という市街が陽炎の海となつて丘陵台地の山の手に向い、社会のうねりを打寄せているともいえた。都会が青霞の入江にひたひたと押しよせているのである。

「病院の真向いの方角にあたる、あのあたりが、G寺院です。その右手がY植物園。ずうつと左にまわつて、M学院、わりに閑静な地帯でしよう。下町につきでた岬とでもいうべき一帯なんですね。翠明荘のうしろは段丘になつています。

他人の家の庭からおりてゆく径があつたりしてなかなか面白いですよ。坂をおりると、古びた寺院があつたり、櫛の細工師の格子窓があつたり、紙函屋さんが、暗い家裡に重い鋼鉄の機械をすえつけていたり、ときには稲荷さんの赤い鳥居が椎の大樹の下に見えたりしますからね。

径をとおると湿つた空気が、ひたひたと肌にくる——あの空気が下町なんでしようね。とにかく義肢などの医療器具をあつかう店も、骨董店も、表具師の家も、みんなひつそりして、店に構えている主人にしても、立働いているひとでも、昼間から夕暮れめいた気配を、その顔に漂わせている。といつた按配なんです。下町というのは零細企業の芥がうちよせられた入江かもしれませんね」

伊達はこれまで久慈に何回か会つた。田所のごく親しい後輩である久慈が、伊達はなんとなく好きになつていつた。おだやかな、新聞社のひとらしくない静かな肌合であつた。

「入江に淀んでいる芥の下町という表現はうまくいいあてていますね」

遠望には都会の波が眩めき、楓や桜、椎、木蓮といつた樹木に埋まつた谷や段丘——わるくないなと伊達は思つた。

久慈はポケットから手巾をだすと痰を、それに吐いた。背たけのあるわりに、久慈は顔が小さかつた。新聞記者というものはお洒落れな人間が多いが、いまに、この人達も汚なくなるのであろうか。

屋敷あとの台地をでて近みちするため二人は草叢の小径を歩いた。緑樹の色が、顔色の冴えない久慈の顔に翳をお

とした。不自由な足さばきの伊達を待ちまち、久慈は歩いた。二人が舗道にでると、犬をつれた婦人が伊達の巨きな軀をちらっとみて通つた。樹木の谷をへだてて M 教会の塔が褐色の翳をつけ樹間に聳えているのがみえる。やがて、彼らは三笠病院とかいた、大きな病院の塀をまがつていつた。

そこから舗道に直角に小径が少し登り坂になつている。久慈は近道を近道をとつれてゆくのである。薔薇に埋れたような洋風の家が小高い場所にあつた。

「D 画伯の家ですよ」

絵心があるのか、久慈は懐しそうにいつた。特異な風景や花鳥を抒情的なムードで描く有名な D 画伯のアトリエがひつそり立つている。クリーム色の薔薇の花に眼をとめていると、玄関の扉がひらかれ、夫人らしい女性が買物籠をさげて出てきた。花鳥を描くことすら、圧迫をうける苦しい時代に、D 画伯は、どのようにして呼吸しているのだろう。

自然の呼吸をやめて人工的な呼吸法によつてやつてゆくんだといわれても、そんなことをしていては樹木も、人間も、獣だつて生きてゆけるもんではあるまい。呼吸というのは自分で決めたものではない。自然が与えた本人の意志とはちがつた体質的なものである。

画境というのは、長い歳月に修正し調節して、やつとできた呼吸法である、そいつを戦意昂揚というわけでとりあげられては次第に息苦しくなつて、しまいには死ぬしかあるまい。久慈は石段をおりてきた夫人をみると、ちよつと会釈をして、また、のどにからんだ痰を手巾のなかに吐いた。

新設されたバタビヤ支局詰でゆくことになつていると、電車のなかで久慈の打明けをきいたが、大丈夫かなと伊達は心配だつた。

翌明荘別館は道から少し奥まつたところにあつた。広い玄関である。外国の主婦のように逞しい腕をむきだしにした女主人が黒いスカートを揺すつて現われた。伊達が靴をぬいでいると

「部屋をみられたら、ボクのところに寄つて下さい」

久慈はそんなことをいつて自分の部屋に入つた。

黒く光るよく磨かれた廊下を背の高い女主人についてゆくと硝子戸ごしに中庭がみえた。若楓が竹群れの青みを一入ふかくみせている。小丘や築山をつくつた中庭には泰山

木の白い花が咲いていた。八重桜の老樹はすでに花をおとして、青葉を繁らしていた。とくべつ、趣向を凝らした庭ではなかったが、廻廊に沿った階下も二階も、庭の四季がみれるように設計されている。

伊達が立止まって庭をみていると、樹蔭に小鳥が翔んでいた。

「街なかですけれど樹木が多いんで、ああして小鳥がやってくるんですよ」

と主婦は説明した。

急な出発だったので、田所は本棚も蔵書もそのままにして立った。田所の生活の匂いが、まだ、部屋一杯に立ち籠めているようだ。

「これでは狭いですわね」と主婦のさわさんが気毒そうにいった。親友とはいっても、個性の強烈な田所の生活圏に身をおくことは、ためらわれた。が仕方もなかった。

翌日、引越してきた伊達は女中たちに手伝ってもらい、一日かかりで巣づくりをした。夜になって、本棚にかこまれた部屋に坐っていると久慈がやってきた。

「まるで学者の書斎そっくりですね」

久慈は微笑った。もともと学生のためにつくった下宿なので、大勢の学生のなかに伊達や久慈などの勤め人が二、三人立交って暮らしているのである。

朝になると玄関におかれた大きな黒い甕に草花をいけたのをみ、正確無比の古い柱時計をふりかえって、青霞みの漂よったような翠明荘をあとに研究所にむかう。研究所につくと書棚のあいだで虚しい仕事をつづけ、黄昏刻になると冷えさびた建物から、重い靴音をたてて出てくる。夜になると自分の部屋にとじこもって暮らす。これが伊達の生活であった。

途方もない無能力は途方もない業績におとらず神秘なものである——そんな詩人の言葉を伊達はぼんやり思いうかべながら、灯影に不自由な左足をなげだし、意味もなく坐っているのである。

ときどき、伊達は主人劉一郎氏の書斎兼応接間に招ばれるようになった。古陶の類や土俗玩具などを並べた棚、パイプを幾本もおいた窓、黒い木目をみせた家具や調度品。なにもかも静かに沈んでみえる書斎は、まるで黒い淵のように淀んでいた。

伊達がはいつてゆくと、黒いロイド眼鏡をかけた主人が静かに椅子をすすめる。押入れから、コーヒーの豆をとりだしてきて、伊達の眼の前でひく。街ではすでに少なくなつているコーヒーを彼は器用にたてて御馳走してくれた。

主人夫妻のあいだには小学生の腺病質なさく子ちやんと三つになる男の子があるだけだつた。厨房では主婦のさわさんが、自らガス台のまえに立つて指図していた。お寿乃さんという四十幾つかになる小柄の小母さんがいた。お寿乃さんには女学校二年生ぐらいの娘がいた。そのほか若い女中が二人ほどいるのである。さわさんの郷里からつれてきた女中である。肉づきのいい主人は、いつも玄関わきの書斎の椅子に坐つて、黒縁の眼鏡をふきながらなんとなく暮らしていた。

主人の劉一郎氏は酒はのまないが、煙草を愛しコーヒーに溺れ、写真の現像に時間をすごし、ときたま、外出すると古い詩集の初版本なんかを古本屋から漁つてくる。古陶についても心をうごかし、花を慈しみ、猫を何匹も飼つている。

白い猫をだいて書斎に坐つている彼をみるとある画家の自画像を思いださせたりする。なにもかも愛し、そのくせ、なにかに打ちこんだり狂気になつて凝つたりしたことのない男であつた。

「モーツアルトは嫌いですか。よかつたらかけましようか」

円い指に鋏をもち器用に竹の針を剪り、音を小さくしてレコードをかける。黒のロイド眼鏡の奥で柔和な微笑がたたえられている。この書斎には強い主張もなければ論理もなかつた。青い淵のような淀みがあるだけだ。

「やつぱり、わたしは怠け者で臆病なんですね。こうして、この部屋に籠つて外へはなるべく出ないで暮らす。そうすると傷づくことも少なくてすみますし、不器用で内気なものが、でかけていつて他人に迷惑をかけるよりはいいと思いましてね。非国民かもしれませんが、わたしは、いままでの生活を壊したくないんですよ」

彼は微笑しながら自分を憐むのである。

「ざわざわ騒ぎまわるより、その方がかえつて戦時下の国民らしいですね」

伊達は彼にとも自分にともつかぬようにいう。いつとはなく知つた主人の生いたちが伊達には思いうかべられるのであつた。

旅館の息子に生れた彼は、子供の頃から絵をかくことが好きであつた。美術学校の試験を何回となくうけたが、うまくゆかなかつた。生活に困らない境遇と内気な性分が手伝つて、いつの間にか生活者というより、趣味人として気ままに育つてしまつた。先代の未亡人である彼の母親が、そんな息子のために嫁をとつてやり、次男夫妻にあとを継がせ彼らには翠明荘をたててやつたのである。

彼ほど役にたたない人間もめずらしい。そう思いはじめると、かえつて伊達には主人の生活が羨ましくなつた。彼は絵の世界でも自分なりに美しさを味わうことを覚えたら、画家になることなど忘れてしまい、書斎のなかに自分なりの宇宙をつくつて楽しんでいる。

「こんな書斎に籠つて世間を知らずに暮らしていて寂しいだろうと思われますけれどね、学生さんをみていると、それぞれの陰翳が、書斎のここまでうつつて来るんですよ。裏の洋館の暗い大広間で絨氈を織つてくらしているバウムさんだつて、もとは技師として来朝したんです。いまはあんな部屋で、遠く祖国にいる妹さんや、年をとつたお母さんのことを胸に描きながら、じいつと孤独な生活をしていんですから、ひとの生涯つてわからぬし、人間の生活つて、どんなにしてでも暮らせるものですね」

などというのである。伊達は病院で考えていた市民の生活というものをのぞいてみた気がした。主人劉一郎氏の生活をみていると家具とか部屋とかいつたものが、しずかに生きた呼吸をしていることがわかるようだつた。

研究所のなかには一応、埃りくさい空間があるにはあつたが、伊達自身の生活には自らの空間などなにもなかつた。これまでの伊達は都会という広い空間をただ歩行しつづけてきたようなものだつた。出勤前の一刻とか、日曜日の一日とか、彼は丘陵一帯の樹木のなかを散策した。そして自分の森をもとめたいと病院で考えたことについて、手さぐりしながら考えを纏めようとした。

ダルな生活をつづけながら、五尺八寸、体重十九貫という重厚な風貌をもつている自分は、ニヒリストにはなれないと伊達は意味もなくきめていた。もつと鈍重なのが自分だと思うのである。

負傷してから、いつそうなつたのかわからないが、彼はできるだけ憤りの発散を惜しみ、なにもしないで生涯を終ろうと考えだした。そのかわり内面だけは涸渇させず充実させて生涯が閉じられたらと思うのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com